同窓情報発信コーナー タロンペ

時代に足跡を記した大先輩・その8

1964年東京オリンピック 体操男子個人総合金メダリスト

遠藤 幸雄

(昭和30年電気科卒)

1964年の東京オリンピックで遠藤幸雄は体操男子個人総合で日本悲願の金メダルを獲得した。

この年筆者は秋田工業高校電気科2年であった。秋工体育館でオリンピックの報告会があり、遠藤は最後の鞍馬で失敗したことについて「金メダル欲しさのだんまり人間になってしまった」と話されたことが記憶に残っている。

1964年秋工は、野球では三浦投手を擁して甲子園春夏連続出場、ラグビーでは1964年の秋田県予選で優勝し1965年1月からの花園で12回目の全国優勝、高校総体で中川衛選手が男子5000mで優勝など全国的なスポーツ名門校として知られた。

遠藤は、秋田県秋田市出身。小学校3年生の時に母親を亡くし、中学1年の冬から養護施設で育つ。中学2年の時、先生の勧めで体操部に入部し、市内大会では数々の表彰台に上がる。秋田工業高校体操部で活躍。東京教育大に進んだ。

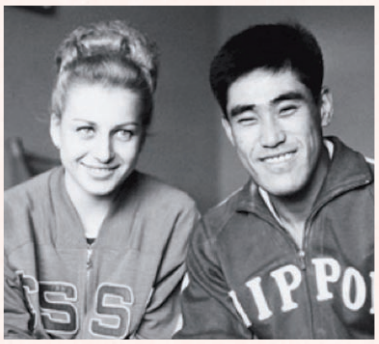
同じ秋田県出身の小野喬を目標に競技を続け、東京教育大学在学時代から体操競技日本代表選手に選ばれてオリンピック、世界選手権など数々の国際大会に出場した。1964年東京オリンピックでは日本選手としては初めてとなる個人総合優勝を果たした。過去2回のオリンピックに僅差で個人総合優勝を逃していた小野は遠藤の快挙を喜び、個人的に遠藤にトロフィーを贈った。遠藤はこのトロフィーを「永遠の記念品」と述べている。東京オリンピック個人総合の最終種目となったあん馬を前に、遠藤は9.00を出せば2位のボリス・シャハリン(ソビエト連邦、ローマ五輪個人総合金メダリスト)が最終種目でたとえ10.00を出しても追いつかない絶対的優位を築いていたが、日本悲願の個人総合優勝のかかる重圧の中、会場が凍りつく落下寸前の演技の止まるミスを連発、長い協議の末9.10をマーク。ソ連の執拗な採点に対する抗議も覆らず、遂に日本に個人総合の金メダルをもたらした。この功績を基にドイツから託された「最も高い成績を残した選手に」と第1回アテネオリンピックの優勝メダルが与えられた。

オリンピック(五輪)では，1960年ローマ，1964年東京，1968年メキシコと 3大会連続出場を果たした。男子体操競技団体総合 3連覇に貢献し，東京五輪では個人総合優勝のほか，種目別の平行棒で金，床運動で銀メダルを獲得した。メキシコ五輪では跳馬で銀メダルを獲得し，3度の五輪で金メダル 5個，銀メダル 2個を獲得した。

1980～2007年日本大学教授。1981年日本体操協会理事に就任後，専務理事，副会長など要職を歴任した。

1989年日本オリンピック委員会 JOC理事。1964年優秀スポーツ選手に与えられるヘルムズ賞，1996年紫綬褒章，2008年旭日中綬章を受けた。1999年国際体操殿堂入りを果たした。2009年3月25日、食道がんのため逝去。72歳没。養護施設への寄付を最期まで続けていた。

東京オリンピック体操競技でお互いに男女の個人総合金メダルを獲得し、体操競技を通じて長らく親交があったチャスラフスカと遠藤は浅からぬ縁で結ばれている。1960年ローマオリンピックの頃から、男女に違いがあるとは言えお互いの美しい演技を認め合い、交流を深めていき、東京オリンピックでの個人総合金メダル獲得を誓いあった。そしてそれが実現することにより、お互いの信頼関係は更に強まった。



後年、遠藤が病に侵され生命が危ぶまれていることを聞いたチャスラフスカは、遠藤に激励の手紙を出したが、その書状には遠藤の主治医宛の「私の大切な友人であるエンドーをどうか助けて下さい」というメッセージが添えられていた。

遠藤夫人と日本体操協会常務理事の要職にあった長男幸一氏に伴われて遠藤の墓を訪れ、日本式に手を合わせて祈りを捧げた。

(出典:笹川スポーツ財団・オリンピックレガシー ベラ・チャフラフスカ より)

会報KANASA3号(1995年発行)に寄稿された遠藤幸雄東京秋工会副会長の「体操競技と私」を転記する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

クラス担任からの勧誘で「け上がり」もできない体操部員が誕生したのは、久保田中学(当時)2年のときでした。一級上には小野清子(旧姓:大泉、現参議院議員)さんがおり、すでに懸命に汗を流していました。

高校受験に際し受験校に迷うことはありませんでした。なぜなら、伝統ある体操競技存在、さらには卒業後の就職という点で秋田工業高校以外考えられなかったからです。

高校時代の想い出、それは3年(昭29)のとき、竣工なった体育館で好ライバル能代高校を破ったこと、インターハイで団体ならびに個人総合で準優勝したこと等、競技力の上では大きな比重を占めています。しかし、個人的には1年のとき、インターハイ(京都)に個人として出場できたこと、何しろ県外旅行が初めて故、京都へ行ける喜びの方が大きかったと思います。

手の平の痛かったことも忘れられません。中学とは異なり、あん馬、つり輪、平行棒が加わったせいでしょう。特に合宿中は忍の一字でした。しかし、おかげで大学時代その痛さに苦労した記憶はありません。

大学時代は大学選手権の団体で2回の優勝を経験していますが、個人総合は5位が最高でした。その後ローマ(1960)、東京(1964)、メキシコ(1968)と3回のオリンピックに出場し、常に勝者になりえたことは幸運の一語と言えます。日本代表の座の獲得には小野喬さんの存在が大きかったと思います。すなわち、私にとり身近な、しかも確かな目標だったからに他なりません。現在、(財)日本体操協会にあって小野喬さんと共に日本(体操)再建の実現に努力していますが、いまあるは秋田で生を得たという明白な原点を大切にしたいものです。 (平成7年10月14日)

◆記　事　　赤川　均(昭和41年電気科卒)

東京秋工会釣り同好会　左から4人目が遠藤